

幼児教育学科公開講座

幼児教育・保育のこれから —要領・指針の改訂をふまえて—

平成29年10月28日(土) 14:00~15:30

玉川大学 教育学部 教授 大豆生田 啓友

はじめに

今日の話題は、教育要領、保育指針、教育・保育要領の改訂(改定)ということが背景にあります。詳細な説明というより何が大事なのかをお話いたします。これから私がお話させていただく内容は、今回の教育要領や指針の改訂(改定)の中にふんだんに織り込まれておりますので、なるべくたくさんのエピソードを話しながら進めたいと思っております。

鯉のぼり

私は仕事柄いろんな園に行きます。この事例の園を訪問した時はゴールデンウィークの頃で、鯉のぼりがたくさん飾られていました。年長児がグループごとに2週間かけて作った鯉のぼりだそうです。製作過程では、年長児たちが「こうしよう、ああしよう」と話し合っていたそうです。この鯉のぼりは、布を染めて、しかも縫い合わせているのです。子どもたちは話し合いながら、作りたい鯉のぼりを実現しているのです。このような製作過程ゆえ、子どもたちは自信満々です。私のところにきて「おじさん、これさ、俺たち作ったんだよ」と自信に満ちあふれています。させられることが多い子どもたちは雲泥の差です。

そんな鯉のぼりを座って園長先生とおしゃべりしながら見ていると3歳の男の子が走ってきて、ソファーに座っている私の膝に座りました。こういう子いますね、初対面なのに平気で人の膝にちょこんと座って、初対面なのにずっとひとりごとでしゃべりかけてくる子。髪の毛をかつこよく立てていたので、誰が切ってくれるのと聞いたら、男の子は「え?先生」って言うんです。先生が髪の毛も切ってくれるのかと聞くと、園長先生があ

わてで「先生が切るはずないでしょう、嘘言っちゃだめよ」って言うわけです。この男の子、さらに外を見ながら鯉のぼりを指さして言いました。「俺もさ、鯉のぼり作ったんだよ、あそこに」って言うんです。はいはい、って思いながら聞いていたら「俺さ、作って持って行ったら、年長がお前いいやつだからいいよって飾ってくれたもん」って言うんです。はいはいって思って聞いていました。そしたら彼が「俺さ、新聞紙で作ったんだよ」って言うんです。たくさんある鯉のぼりをよく見ると、中に新聞紙の鯉のぼりがあります。え!あれのこと?と尋ねると「そう、俺が作った新聞紙の鯉のぼり」と言いました。

園を訪問した時間は、他の三歳児たちは部屋に集まっている時間です。部屋から抜け出てきたとすると、部屋に戻らないと悪いと思い、担任の先生のお名前は?と尋ねると「りょうこ」って彼が言うんです。さらに「りょうこさ、いつもさ、俺のことかわいいかわいいって言うんだよ」って言うんですね。それを聞いていた園長先生も「あたしも言うでしょ!あなたのことかわいいかわいいって!」と仰っしゃいました。

この園の年長児は、自分のやりたいことを夢中になってやり遂げる経験をしています。これは成功体験です。夢中になって、自分のこうしようという思いを達成している子たちは、明らかにその後の育ちに影響を与るといわれています。また、3歳の彼も周囲の大人から肯定的に受け止められています。乳幼児期に適切に受容され肯定された子たちは、そうでない子たちと比べて、その後の育ちが良いということがわかっています。これは簡単なことではありません。この男の子のことを多くの仕事をこなしながら肯定的に受け止められるでしょうか。また、子どもたちが夢中になってやりたいことをやり遂げる保育ができるでしょうか。これはプロの仕事です。ただ、肯定的に受け止めるよりも怒るほうが、



遊びの中で学ばせるよりも『させる保育』をするほうが、コストがかからない場面もあるでしょう。つついそなっている現実があるかもしれません。

これからの“遊びが学び”

今世界は保育の質に注目しています。それはたくさんの研究の成果が、乳幼児期に良い保育を受けた子はその後の育ちにより影響があることを示しています。50年以上前のアメリカでの研究ですが、3歳から幼児期に質の高い良い保育を受けさせました。ここでいう質の高い保育とは、子ども主体の遊び中心の保育、さらに保護者への支援です。この研究の結果はすぐには出ませんが追跡調査から驚くようなことが分かりました。良い保育を受けた子は高校の卒業率が明らかに高い。収入が高い。持ち家率が高い。離婚率が低い。犯罪率が低い。生活保護需給率が低い。つまり良い保育を受けた子たちは、大人になって経済力が高く、幸せになっている子たちが明らかに多かったです。他の研究で

も似たような結果が出ています。つまり、子ども主体の保育を行うこと、あるいは親への支援を行うことは、その子の人生に影響を与えるだけでなく、その国の経済に影響を与えるのではないかと、ということなのです。だから良い保育のためにお金をかけようっていつているわけです。日本の政治家もこの話を知っているから幼児教育の無償化って出してくるんです。でも幼児教育の無償化だけでは、上がらないんです。ここで言いたいことは、保育のお仕事は、その子の人生やその国の将来に影響を与える可能性があるくらい重要なことだってことが、世界では話題になっている。ではそれは何を育てたからそんなに成果があったのか。これが今回の保育指針・教育要領の裏のキーワードになっている「非認知能力」というやつです。これを幼児期に育てたかどうか極めて重要であるということが今回の保育指針・教育要領の重要な基盤になっています。

ベネッセの研究でも、園で遊びこむ経験が多い子の方が、小学校以降の学びに向かう力が高いことがわかっています。一斉保育よりも、子どもの主体性を重視した自由保育をしている園の子どもの方が、語彙が豊

富であるという研究もあります。語彙が多いということは、学力全部に影響を与えます。それくらい重要なことなのです。早い時期から勉強をさせたほうが将来勉強のできる子になると思いがちですが、逆です。今回の改訂は、そう考えると小さな改訂(改定)ではありません。これまで教育の始まりは小学校であるかのように位置づけられてきました。今回、改訂(改定)で何を一番大事にしているかという、アクティブラーニングです。もう紙の上の勉強ができるだけではだめなのです。これからは自分で調べたり、考えたり、話し合ったり探求したりする必要があります。そして、それは保育園・幼稚園・こども園からスタートします、と位置づけられました。だから教育の始まりは、保育園・幼稚園・こども園なのです。「遊びが学び」はこれまでもやってきたことです。ここが充実することがスタートになります。だから保育所・幼稚園・こども園の3歳以上は同じ教育がありますと位置づけました。しかも、今まではまるで小学校の準備のために「ここまでできるように」というようにやってきたのですが、これからは違います。遊び仕立てのところから1年生の授業を始めてください。今までのように、はいこれからは一斉授業です!ではなく、「遊びが学び」を受けて、1年生をスタートしてください。だからこれから小学校との関係が変わるはずです。「遊びが学び」が大事なのだと位置づけられたわけです。遊びをけっこうやっているという園も、それが本当に学びになっているのか、ちゃんと説明できることが大事です。砂場で遊んでいました、だけではダメで、砂場でこんな経験、こんな風な育ちが見えてきました、と言えることがプロのお仕事です。ただ預かっているだけではなく、豊かな経験をさせてください。親たちにも「遊びが学び」を説明できるようにしましょう。

例えば、0・1・2歳の保育って、安全・安心・預かるだけだと思われるかもしれませんが、園によって全然違います。この写真は0歳児の2月頃の写真なのですが、だれもお背中べったんせずに絵本を見えています。絵本が面白くて仕方がないんですね。先生のひざの向こうに、絵本が10冊くらいあります。子どもたちがもう一冊もう一冊って言うんです。なぜこんなに絵本好きな子た

ちになったのでしょうか。

私の研究グループで、絵本と保育の勉強会っていうのを公立保育園の先生たちとやってみました。この担任の先生は、0歳児の研究グループに参加していました。0歳児クラスなんて絵本どころじゃないです、前半はね。後半になってちょっと絵本のことが面白くなってきた時期に、0歳児担当の先生たちに質問をしました。赤ちゃん向けの絵本は、顔が出てくる絵本が多いのをご存知ですか?と訪ねても先生方はわからないというので、赤ちゃんは顔が好きで、顔から情報を読み取っていることを説明しました。だから、保育士は、特に小さい年齢の子どもに関わる際に、あまりマスクしないほうがいいって言われているんですね。NICUでも、赤ちゃん向けには看護師さん、なるべくマスクしないで関わろうっていう取り組みがあります。つまり、あの人たちは赤ちゃんじゃないんです。という話をしたら、この先生面白いんです。いろんな顔が出てくる赤ちゃん絵本を、全部読んでみるんです。そしたら、1冊子どもたちがえらく面白い絵本があるんです。どんな絵本かって言うと、顔写真が出てくる絵本です。絵で書いてあるより、写真で顔が出てくるほうがウケるんだと思って、この先生ちょっと工夫しました。どんな工夫かって言うと、0歳児の担当の先生6、7人いるので、その中の4、5人の先生に協力してもらって、こんな写真を撮ったんです。○○先生が、いないいなーいばあ!って写真です。これを引き伸ばして台紙に貼り付けて、なんとか先生が、いないいなーいばあ!って、簡単な手作り絵本を作ったんです。そしたら大人気です。0歳児担当の方いらしたら、年明けくらいから、これ絶対いけますよ。もうウケるウケる。私も見に行きましたけど、面白い面白い。もう一回もう一回と延々続くわけです。あんまり毎日なんで、この先生さらに工夫しました。子どもの顔写真撮ったらどうなるだろう。親たちの許可を取って、なんとかちゃんがいないあいばあ!ってやったら、みんな真剣な顔して見て、そのあと、前見るだけじゃなくて横見るんです。お前、いつも泣いてるのに笑ってんじゃん、みたいな感じで。面白いくらい横見るんです。このあといないあいばあ絵本がえらくブームになっていくわけです。だから



この先生が絵本を読むと、子どもたちがスーッと集まってくるんです。1、2年目の若い先生がいるんですけど、私のところに全然来ないと嘆くんですって。子どもたちは、最初は誰が読むと面白いってことから入っていくんですね。しばらくはそうなんだけど、だんだん若い先生でも、うまくいくようになっていくんです。保育って、ちょっとした工夫なんだなって思います。

この先生は0歳児から1歳児に持ち上がりになりました。そしたらまた面白いんですけど、やっぱりこの先生が絵本を読むとブームが起こるんです。『おおきい小さい』という絵本があります。この絵本、大きい、小さいって、何度も出てくるんですけど、その度に1歳児クラスの子どもたち「おおきいね、おおきいね」としか言わないんです。1歳児で大きいとか小さいとかわかるのかしら。じゃなんで小さいって言わないのかな？毎日大きい大きいなので、先生ちょっと工夫しました。子どもが、今これが面白いんだって思ったら、じゃあこういう環境を用意してみようっていうのがプロの仕事です。どういう環境を用意したか。壁面に動物の写真を張ってみました。壁面はうさぎちゃんとか無駄に貼る必要な

いんです、むしろ写真が効果的です。いろんな動物の写真貼ったんです。そしたら子どもたちは、「これ、これ」とか言いながら、写真のことを一生懸命言うわけです。写真の中に、象が写っています。「象おおきいね、象おおきいね 象おおきい、象おおきいしか毎日言わなくなってくるんです。子どもたちは象が気に入ったらしく、「象が大きい」になんとか応えられる絵本がないだろうか？そうです、子どもが面白いと思ったら、じゃあどう手を打とうかを考えるのが保育です。遊びが学びになっていくのが保育です。園には象の絵本はありません。先生がインターネットで探してみると、こんな本がありました。『ぞうはおおきい』早速これ買いました。この本読んだら面白いんですよ、こんなに大きく開くんです。象は顔が大きいって先生が言うと、子どもたちは「おおきいねー！」、象の鼻は？って言うと「ながーい！」って子どもたちノリノリなんですよね。

この先生、大きな声では絵本を読みません。小さな声で読みます。いろんな子たちが寄って来ますが「そうだね、はい、じゃあ座ってね」って丁寧に、力づくで聞かせないんです。面白いから聞いちゃう。だからお

背中ペったんなんかこの子たちにあまり必要ないんですよ。こんなふうになんか夢中になってくわけです。そうすると毎日面白い面白ってなってくわけですけど、「先生、うちの子、象、象、象、象、言ってるんですけど、何がありましたか」って親から聞かれる訳です。この先生もなかなかの人で、「いま1歳児クラスは象の研究やってます」って言ったそうです。もう親たちもメロメロです。僕ね、よくわかりました。いい保育は、親たちを巻き込む。親たちがファンになってきます。

そのあと、この先生は親たちにもっと伝えなきゃと思って、写真一枚貼り出すんです。今日こんなこと面白かったですってという写真1枚。これがもっと親たちを巻き込んでいきます。本当は遠足で動物園に行って、子どもたちに象を見せることができたらよかったんですが、遠足の予定は決まっていたので変えられないんです。そこでこの先生は一人で動物園に行ってきました。そして象の写真いっぱい撮ってきて子どもたちに見せたら、子どもたち大ウケで、動物園に行きたいって話になるんですけど行けません。それで親たちに、写真見せたら大ウケでしたって話したら、翌日から、色んな子たちが、親子で動物園に行ってくるんですね。動物園に行くと象のTシャツ売ってるらしくて、クラス中、象のTシャツを来ている子たちになったそうです。このあと象からシロクマブームになるんですけど、この話は長くなるので別の機会にします。

行事でもいいし、普段の遊びの中でもいいんですけど、こうやって子どもと話し合いながら、子どもの声を聞きながら、作っていくような保育がこれから重要になってきます。ある園では、今までだったら、5歳児が4月にオタマジャクシを持ってくと「よかったね、じゃ今日これ持って帰ってね」で終わっていた話を、子どもた

ちに「このオタマジャクシどうする？」って聞くように変えました。すると「飼いたい」という話になりました。じゃあ、どうやったら飼えるだろうか。生かしていくために器だとか何が必要かを全部子どもたちと話し合いながらやっていきました。その後子どもたちのアイデアでオタマジャクシ研究所ができ、親たちも巻き込んで2か月間、オタマジャクシが蛙になっていくまでのプロセスを研究しました。本当に面白い事例でした。誰が一番喜んだのかといえば、ベテランの先生方でした。「こんなに楽しい、保育って楽しいと思いませんでした」という先生もいました。そうです、させる保育をしていたら面白いはずがない。この仕事の何が面白いかといえば、子どもと一緒に作っていくから面白いんです。先生がわくわくして、先生が保育が楽しくなってくる。誰が一番得をするか、それは子どもです。いままでさせられるだけだったのが、自分たちがやろうとすることが実現していくわけです。この事例の子どもたちは本当に意欲的な子どもになりました。また、親たちが保育にもものすごく参加するようになりました。親たちが園の保育を理解するようになりました。そして小学校からも理解が得られるようになりました。今までは“遊びが学び”の意味がわからなかったけど、園の取り組みからよく理解できるようになったとのことでした。

これからの保育は、遊びが学び、しかも子どもたちの成長にあわせて、あるテーマでもって遊びが継続するような保育が求められるのだと思います。子どもの笑顔がこれから先も続いていくということが大切です。保育に携わる先生方の日々の保育のおかげで子どもたちの未来があります。保育者を志す学生の皆さんにも、ぜひ仲間に入っていただければと思います。

(文責：中尾繁史)